

※ 本文より抜粋。部分的に文章の入れ替えもなされたカラージュです。内容の雰囲気と、文書の体裁の参考にして下さい。

古ぼけた私のタイプライターの、これが最後の仕事となるだろう。どれほどの人に読まれるものは、私のあずかり知らぬところだ。

少年時代より激変を経てきた我がが母国。隣国との戦争、社会主義政権の誕生、アメリカの支援による軍事クーデター、そして軍事政権。米帝の傀儡が、独裁者となって同胞を圧迫し、我らの自由と言論を弾圧するに至り、私は怒りをペンにぶつけ始めた。

社会主義政権が作った国立大学の、社会学者。そして民主化運動の思想的支柱。それが私の肩書きであり、市民が祭り上げたポジションだった。

私のもつばら著述と演説によって活動し、武力闘争からは一線を画していたため、軍事政権も簡単には手が出せなかった。

たびたび拘留され、脅迫はされたが、行動の自由を制限されても、暴力や拷問については、最初の拘留のとき以降ほとんどなかった。多くの反政府運動家たちが、投獄され、拷問され、抹殺されていった最中なかにある。それは皮肉にも、すでに独裁政権から離反したエゴイスティックな米帝を始めとする西欧自由主義国家連のマスメディアのおかげだ。彼らが私を祭り上げ、正義の偶像と化し、鎧よりも要塞よりも堅く、私の命と「自由」を保証した。

1
監視室

「……狂人め」

私はガラスに手をつき、ようやく震える声を絞り出した。薄闇の中にバビエルの黄色い歯を見た。

「いつになく気持ちのこもったほめ言葉、痛み入ります。その調子でお願いしますよ。活字は味気なくてね」

この、悪魔……！ 私はバビエルにつかみかかろうとし、屈強の衛兵の一人に羽交い締めにされた。

わずか数メートルの距離の向こうで、ミラー一枚でわずかに現実味を薄められた光景が、私の目に映じるのだった。

アンは後ろ手に拘束されていたが、少し部屋を見回したあと抵抗を始めた。後ろから来た長身の警吏は、長い足を身も柔らかく高く上げ、アンのみぞおちに、軍靴の先端を見事にめり込ませた。もちろん息子はひとたまりもなく、その場に崩れ落ちる。この間、音声は入らない。この暗い部屋のマジックミラーは、こちらにせり出して、その下部は我々の腰のあたりでは、古めかしいランプやスピーカーに、スパイラルコードのついたマイクなどのついた、無線室のような操作盤になっている。

鏡の向こうで、最初に入ってきた太った巨漢の警吏が、中央にあつた粗末な机を軽々と動かし、代わりにベニヤの浅く大きな箱を置いた。縁の高さが十センチあるかないかで、底面は百二十センチ四方くらいか。そこに麻袋から、そば殻のような荒い粒が、ざらざらとまんべんなく注がれ、敷き詰められた。

床にうづくまって悶えていた息子は、警吏の一人に両脇を抱えられ、ろくに抵抗もできずズボン

を脱がされ、下履きも取られ局部を剥き出しにされた。苦しみなながらも羞恥が、その白く端正な顔

の、両頬に赤みを添えていく。

そう、子どもの頃から近視で眼鏡をかけ、地味で風采の上がらなかった私と違い、アンヘルは端正で愛らしく、美しいとも言える顔立ちをしている。そう、やや浅黒い肌の私に似ず、ロシア人のように抜けるように白い、日本の少女のようにきめ細やかでなめらかな肌を持っている。

「よく聞こえた。やむを得ないので続行だ。だが相手は　　だということを忘れるな。加減しろ。意識も失わせるな」

息子は鞭打たれた。甲高い掠れ声の悲鳴が、スピーカーを震わせた。胸部から腹部にかけての赤い筋、じりじりとわき出す鮮血……。

「素晴らしい。あなたの怒りと悲しみを、ひしひしと感じます。私への憎しみを」

2 尋問室

「……断る！ 私を殺せ。いくら何でも息子をそんな下劣な行為の犠牲にできるものか」

バビエルは機器に手つき、小さくため息をついて見せた。

「そうですか。では、こうします。我々の部下にも、同性を性の対象とする者たちがかかりいます。そして、特に　　の者を好む輩もね。そういう者から二人、特に屈強で凶暴な者をすでに選んでありますね」

「しばらく黙っていてくれ。君を殺したくなる」

「私が甘かった。お前をこんな目に遭わせてしまうとは。……すまん……私は……父親失格だ」
アンヘルは私の手を握り返す。

「パパ、謝らないで。僕は約束したじゃないか」
「アン？」

「パパ！ やめて！ 何でなの!? 何でこんなこと……」

「ひどいよパパ……。ママに誓ったんじゃないの？ 殺されても奴らの言いなりにはならないって。だから僕……」

「あ…… や、だ。……やめ、て……」

言っても無駄とわかっていても、予想もしないこのような淫らな行いに戸惑い、恥辱に頬を染め声を上げずにいられないのだ。語尾が震えて消え、持ち上げた頭をごつんと床に落とし、アンは再び顔を背ける。

「パパ、パパ！ やめて！ ……気持ち悪いよ！ 痛いよパパ、ねえ、パパ……」

私が閉じようとする足をぐいと拵けて、根本まで入れた親指を爪の先まで抜いては押し込み往復させるうちに、抵抗はゆるみ声には元気がなくなっていく、やがてアンはまた顔を伏せ自分の口を自分の腕で塞ぐ。私は背徳の徒だった。もう息子に許してくなどと言う資格もない。

「……僕……壊れちゃう、よ……」

「僕は命の次に何をかければいいの……？」

「すまなかった、アン……」

本編をお楽しみに！

SAMPLE